

令和三年度

熊本県障がい者芸術文化活動

普及支援事業

報告書

銀河系の海（部分） / 松本寛庸



障害者芸術文化活動支援センター@熊本

愛隣館



目次

はじめに	1
01 地域の現状と課題、めざす成果	3
02 事業実績の概要	5
生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7	7
ワークショップ 「全盲のおばあちゃんと牛をつくろう」	8
制作風景動画の作成、みんなでウォールアート 協力	9
移動美術館	10
ギャラリーウォール	11
講演	13
作家・作品の調査・発掘、ネットワークづくり	14
相談支援	15
評価・発信	17
03 事業実績の詳細	19
04 生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7 出展作家紹介 キュレーター 長尾萌佳氏	23
05 展覧会来観者のアンケート(抜粋)	39
06 アール・ブリュット パートナーズ熊本・社会福祉法人愛隣園 事業事務局	45

はじめに

日頃より障害のある人々の芸術活動支援に、ご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。この度、令和3年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業（美術分野）報告書を作成しましたので、ご一読頂ければ幸いに存じます。

本年度、熊本県立美術館本館第一展示室で初の生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7に、蔓延防止期間の中1,656名もの方々にご来場頂きました。こんな時だからこそ歩みを止めず、工夫を重ね、何とか開催にこぎつけました。作家の皆様をはじめ、関係者の方々には多大なご協力を賜りましたことに、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回は展覧会場内で県内事業所のグッズ販売を試み、作家の経済活動への参加を支援しました。制作風景動画を上映し、来場者の作家への理解が進みました。活動の歴史を振り返るコーナーを設け、支援者の輪が広がりました。全盲のおばあちゃんが生まれて初めて、陶芸の講師となりました。

この他、やまがアート、人権フェスティバル、荒尾市の小中学校での展示等、様々なイベントや会場で展示をする機会を頂きました。また、常設展のできるギャラリーウォールを開設し、新たな交流の場となっています。関連行事による、スタッフのコロナ感染は発生しておりません。

「魂の表現」に多くの方々が心を打たれ、支援する動きが広がっています。作家らが作り出す作品に人々を引きつける力、「生命」を感じる力があることも県民の皆様浸透していると実感しています。

これからも、皆様にご指導を賜りながら、障害者芸術活動の振興に努めたいと存じます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

社会福祉法人 愛隣園
アール・ブリュット パートナース熊本

地域の現状と課題

<現状>

昨年度から続く新型コロナウイルスの影響により、障害福祉サービスをはじめ、地域全体に様々な制約が課せられる中、変わらずに創作（表現活動）を続ける作家たちの感染防止に苦慮しながら、家族・支援者は芸術活動支援を続けている。

熊本では、くまもとハートウィーク「障がい者芸術展」や7回目のアール・ブリュット展をはじめ、地域ごとの展示会など、障害のある人たちの芸術に触れる機会が毎年増えている現状にある。

これに伴い、障害のある人々らの芸術活動に対する関心が高まっており、行政や団体などから作品の二次利用等の問い合わせが増え、その構想も多様なものとなってきた。県民の中に、芸術作品の鑑賞を通して感動や共感が生まれている手応えがある。

<課題>

○障害のある人への理解を深める機会の創出と、関心をもつ人々へのネットワークを拡げていくことで、多様化する作家のニーズに合わせた活動を展開していけると確信しているが、その機能となる人材と予算の確保は毎年の課題となっている。

○日常的に、障害のある人々との接点のある内面の豊かさや表現の独自性を伝えられる生活と創作の場の支援者（親・施設スタッフ）が、高齢化やコロナ禍での制約の中で、活動しづらい状況が起きていることも課題である。

事業実施により得られる効果

めざす成果

「障害のある人たちが生きやすい社会になる」という大きな目標に向けて、本年度は①「障害のある人たちの芸術に触れる機会を、年間を通して提供する」②県立美術館とタイアップして大きな展覧会を開催する。③「既存のネットワークを活用した取組を推進する」ことを目標に、次のような効果を目指していく。

①日常的に障害のある人の芸術に触れる場所をつくり、障害のある人の表現を鑑賞する。その感動の中から認識の変化が始まり、障害の正しい理解と差別解消へとつながる。②「展覧会」を福祉施設職員の人材育成の場として運営し、美術館等、芸術系社会資源や専門職との連携、展示の方法等を学ぶ。③作品を活かしたグッズ制作とショップと連携した販売を試み、作家の社会経済活動への1歩を踏み出す。④熊本の作家や県立美術館での継続展覧会の開催が九州ブロックや全国へと周知され、作家の県外からの出展オファーなど活躍の場が広がる。

事業実績の概要

①相談支援：芸術活動支援市民ネットワークと歩む8年間の実践経験を基に、「障害者芸術文化活動支援センター@熊本 愛隣館」では、通年で156件の相談に個別対応した。

②人材育成：熊本県立美術館での展覧会準備では会場を計画的に作り上げていき、その段階ごとに参加する人材・スタッフのスキル向上を図った。また、県内各地で開催した移動美術館や常設展示場となるギャラリーウォールでは、事務局スタッフが展示・撤収・運営のスキルを身に付ける機会と捉え、そこに関わる人達とともに作り上げることが出来た。

③連携：これまで事業を継続してきた信頼関係に基づき、コロナ禍で活動制限がかかる中でもオンライン会議等を活用し、連携して事業を実施することができた。これまでの展覧会場の6倍程の広さとなる熊本県立美術館本館第1展示室で展示を行った。また、新たな取組となる物販等を実施することができたことも、ネットワークを活用して各分野と連携を図った結果だと言える。

④展示実績・発信：5年連続となる熊本県立美術館本館での展覧会を、1000㎡の会場で、新たなキュレーターを招き、多団体との連携の下開催することができた。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策を十分施した。

また、出展作家の制作風景動画を各家族、支援者（施設）に撮影してもらい、普段の制作する様子が分かる動画を作成し、会場内で上映とホームページ上で配信した。

開催期間中は、コロナ蔓延防止期間と重なったため、福祉事業所等の関係者の来場は激減した一方、毎年展覧会を楽しみにしてくれている方や報道等を見て来場して下さる方が多数来場し、県民の障害者芸術文化活動への関心の高さが伺える展覧会となった。

事業により得られた成果

今後の成果の活用方法

① 「多分野かつ広域ネットワークの活用」

これまで事業を継続する中で築いてきた従来のネットワークに新たな広がりが生まれた。やまがアート実行委員会との連携では、廃校となった中学校で障害の有無に関わらず、アーティストが集結するイベントで、旧職員室という人が一番集まる場所での展示を任された。また、県の人権フェスティバルでの展示と人権同和 web 講座で講演したことにより、荒尾の小学校校長の要請を受け、協力展示につながった。この様な活動を通じ、本会の認知度と活用方法が広がっている実感を持てた。特に本年度は熊本県立美術館での展覧会開催までに、会場費や展示・物販等、多方面から沢山の方々の協力を頂き、連携することができた。この動きを絶やすことなく継続していきたい。

② 「個別性と専門性を重視した、ことわらない、なんでも相談支援の継続」

これまで「ことわらない、なんでも相談支援」をモットーに行ってきたことで、作家・家族・支援者との信頼関係の深まりが感じられると共に、芸術活動全般の幅広い相談事を受けている。また、県を越えて相談できる関係性も出来始め、活動の範囲も広がりを見せている。これからも、作品の価値や作家の権利を守ることの必要性・重要性を説明することを心掛け、作家の利益となるような支援を続けていきたい。

③ 「作家の自立支援と作品の保護」

芸術活動を通じた作家の自立を実現できるように取り組んだ。作家と専門家をつなぐ事への中間支援としての役割を担う支援センターとして、作家の自立と作品の保護を目標に、原画購入希望者と作家との間で購入までの準備をお手伝いし、売買契約等の補助を丁寧に行った。

④ 「新しい生活様式への適応、ICT 活用」

昨年度から続くコロナ禍の影響により予定通りの支援が出来ない中、新たな様式として、インターネットを使った取り組みを行った。蔓延防止期間と重なった展覧会では、開会式のライブ配信を行い、ホームページ上では、来場が難しい方でもオンラインで楽しめるよう、様々なコンテンツ（制作風景動画、ギャラリートーク、作家紹介等）を準備した。コロナ対策を施した展覧会場は、外出を自粛していた人たちの出かけるきっかけになっており、次年度以降も with コロナ様式の取り組みを続けたい。

⑤ 「支援モデル“熊本方式”の推進」

作家が日常生活の範囲を超えて、専門職や社会資源との関わりを持ちつつ地域社会で自己実現ができるように、双方をつなぐ役割を支援センターが担う支援モデル“熊本方式”を推進していく。

本年度は、県内事業所で作られているグッズを販売する場所を設けたことで、障害のある作家への経済面での支援につながった。また、県や県立美術館、大手民間会社らの大きな協賛もあり、熊本の地で障害のある作家らの芸術活動支援が広がり、障害者芸術文化活動が根付いてきた実感を持てた。

今後も、多様な資源とネットワークを持って地域の作家を育むプロセス「芸術でつながる地域共生社会」づくりを推進する。より多くの県民が参加し、展覧会や作品への個々の感動が共生社会を推進していく本事業を、私たちの地域熊本で続けていきたい。

生の芸術 Art Brut 展覧会 Vol.7

令和4年 1月25日～2月6日

熊本県立美術館 本館 第1展示室

総来場者数 1,656名

アンケート回答件数 187件

県内の作家 25名 作品約280点を展示

県内7事業所のグッズ販売

ハイブリッド開会式の実施

(展覧会 HP:<http://aileans.com/abpk/>)



ワークショップ

全盲のおばあちゃんと牛をつくろう!

令和4年1月29日(土)

参加者16名

講師:小川ハツ子氏、境喜美代氏

コーディネーター:長尾萌佳キュレーター



【参加者の声】

- ・指先にピリピリとした感覚が続き、身体全体にちょうど良い緊張感があって、心地よい時間でした。
- ・とても難しかったですが、手の感覚だけで頭の中にイメージが広がっていくような不思議な感覚でした。また、作っている途中、周りの音や匂いなどに敏感になっていました。
- ・日頃指先の感覚を細かく意識することが少なかったと気づきました。「手で見る」という感覚を少し体験させて頂けたと思います。感触、感覚に意識を向けて過ごしてみようと思いました。

制作風景動画の作成

今回の選出作家25名のご家族・支援者に作家の皆さんの制作中の様子等を撮影して頂きました。作家の皆さんの普段の様子が垣間見えます。この何気ない日常から今回の展覧会に選ばれるような作品が生まれています。



みんなでウォールアート 協力

KKT エンタープライズより依頼

令和4年1月29日～30日にイオンモール熊本にて、荒木聖憲氏の「四季彩の楽園」の拡大コピーしたものを756パーツに分け色塗り。参加者皆で一つの作品を作り上げた。

Youtube 番組で配信。



移動美術館

やまがアート in 鶴城 約 1,700 名来場

令和3年 10月30日～11月3日

旧鶴城中職員室 6名の作家



人権フェスティバル 約 250 名来場

令和3年 11月27日

ホテル熊本テルサ 5名の作家



移動美術館@荒尾第三中学校、緑ヶ丘小学校

令和3年 12月6日～12月18日

10名の作家 展覧会ポスター



移動美術館@熊本県庁

令和3年 12月21日～1月14日

2名の作家 展覧会ポスター



【来場者の声】

- ・心のこもった作品、見て心が豊かになった作品ばかりです。昨日悲しい事がありましたが、今日は元気になれました。このように展示の場所が幅広くなっていくことを願っています。
- ・会場に入って来られた方が、ここにこんな感度が待っていたなんてと長い時間をすごして行かれました。初めて見たけどすごくて圧倒されたと言われる方、自分の悩みや迷いをふっきるパワーをもらったような気がすると言われる方。今回も作家の皆さんを県民として誇らしく思い、嬉しい時間を過ごさせて頂きました。

ギャラリーウォール

本年度4月に開設した常設貸しギャラリー。地域活動支援、基幹相談支援センターに併設。

4月1日～5月7日 松本 寛庸 氏

5月13日～6月10日 野尻 三正 氏

6月11日～7月9日 山品 聡美 氏

7月13日～8月16日 松本 寛庸 氏

8月18日～31日 中山正一郎 氏

9月 3日～17日 服部 秋彦 氏

9月20日～10月3日 中山 颯良 氏

10月9日～27日 榊 建盛 氏

11月10日～29日 松本寛庸 氏

12月 1日～15日 ゆうあい園さをり織り展

2月15日～3月12日 曲梶智恵美 氏



スタッフの声

- ・ギャラリーウォールの展示スペースで個展が開かれることにより、空間の雰囲気が明るくなり、利用者の癒しの場所になってきた。
- ・一般の鑑賞者も多く来所されることで、地域活動支援センターの利用者の方との新たな交流の場につながったと感じている。本年度 11 回個展、展示が開催され、約 1,300 名の鑑賞者が来場された。
- ・展示されている作品の前で、地域活動支援センターの利用者の方が日中活動や軽作業を行われるが、お互いが溶け込んだ感じで新しい空間が出来た。
- ・展示作品が変わるたびに室内の雰囲気も変わり、利用者の表情の変化、様々な感想から会話が弾んだ。時には来場された方と利用者の方の話が盛り上がり、とても良いコミュニケーションの場となった。
- ・ギャラリーウォールがあることで、今以上に地域活動支援センターも色々な方々に知ってもらい、利用して頂けるきっかけとなってほしい。
- ・年間展示スケジュールに関して、搬入搬出を含めた計画を作成し、作家スタッフがスムーズに展示できるよう更なる工夫が必要。展示案内や作家募集について、もっと地域の人たちに知って頂けるように、自治体の広報誌等での掲載などを継続して行っていく。
- ・年間を通して、安定した作品展示を行う為に、協議などを行う必要がある。
- ・ギャラリーウォールは、思った以上に見て頂けたような気がしている。
- ・課題として、年間を通して安定した作品展示を行っていくために、関連機関、異業種等とも情報交換が必要である。

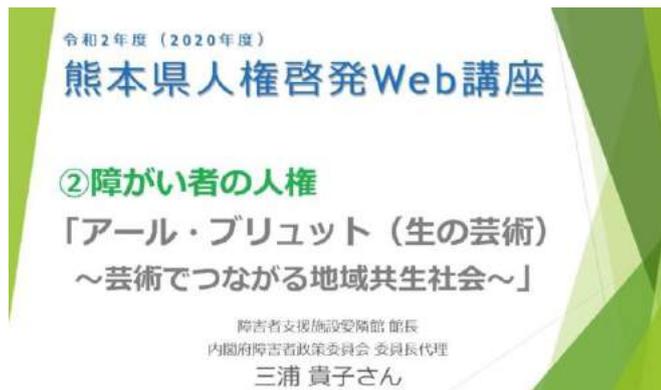
講演の実施

1. 熊本県人権啓発 WEB 講座

(熊本県環境生活部県民生活局人権同和政策課)

「アール・ブリュット(生の芸術)～芸術でつながる地域共生社会～」(7/21～WEB 配信)

アール・ブリュット パートナース熊本 事務局長 三浦貴子



2. オンラインギャラリーツアー (2/1～WEB配信)

本展覧会キュレーター 長尾萌佳 氏

展示作品の解説動画



作家・作品の調査・発掘

作家・作品訪問調査 89件

情報提供による作家発掘 13件

(累積登録 97名)

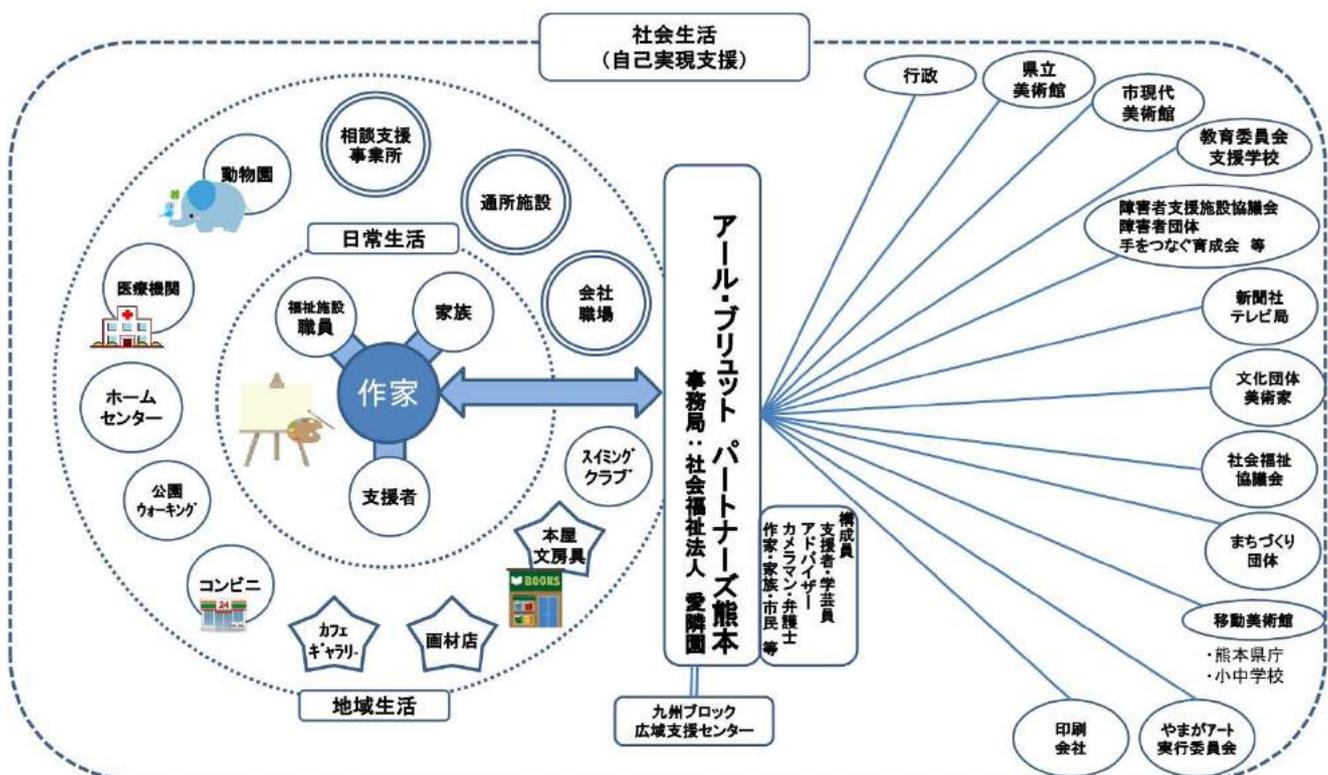


ネットワークづくり

アール・ブリュット パートナース熊本会員の拡充 一般会員 129名 法人会員 31団体

地域資源の連携ネットワーク型障害者芸術活動支援モデル「熊本方式」2021

☆「熊本方式」とは、作家を中心に、福祉、教育、芸術、企業、行政等が市民団体として連携し、地域に根ざして、障害者芸術活動を振興していくモデルです。作家の家族等も輪に加わり、互いに刺激しあい高めあって行く(交互作用)を目指しています。作家の自立・社会参加と共に、芸術でつながる地域共生社会が目標です。



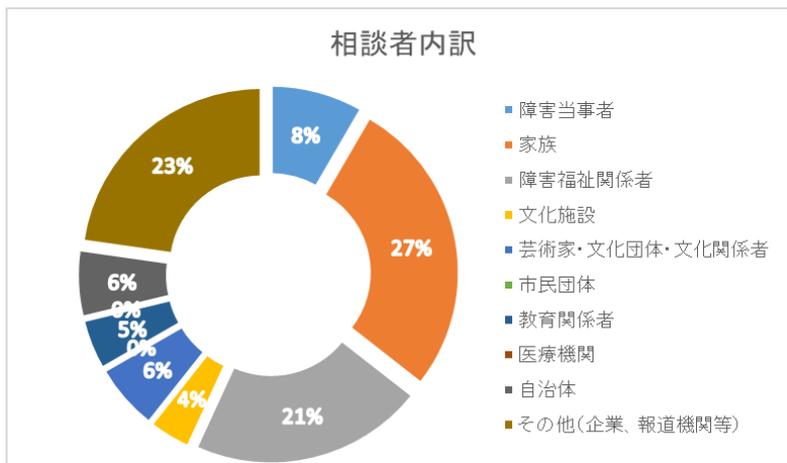
相談支援

・連絡調整件数

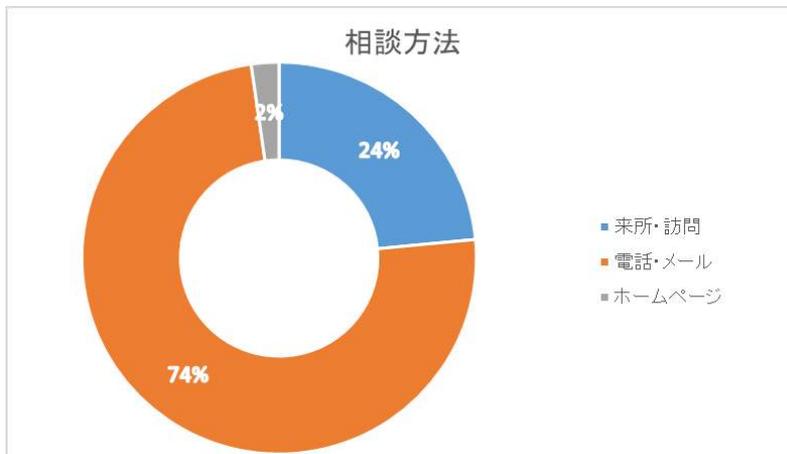
情報提供、連絡・日程調整 メール 504件 会員メール(情報発信 33件) その他

・相談件数 156件 (作家・家族・支援者・企業 等)

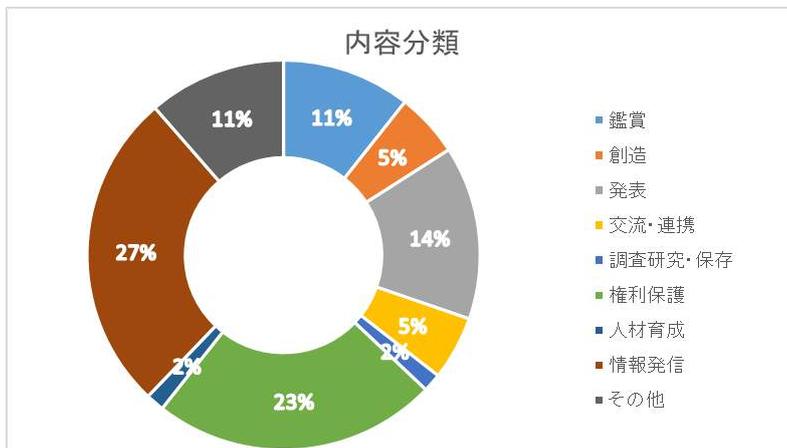
芸術活動等に関する事、展覧会・移動美術館に関する事、原画の売買に関する事



相談者の内訳としては、「家族」の割合が一番高かった。次いで「その他」「障害福祉関係者」と続く。また、「市民団体」「医療機関」からの相談が無かったことから、今後ネットワーク拡大の課題だと言える。



相談方法で一番多かったものは「電話、メール」だった。訪問調査時や展示会場等で相談を受けることもあり、直接面と向かって話を聞く機会もあった。また、ホームページからアクセスしてくる方もおり、活動の認知度が上がっていると考えられる。



相談内容で多かったものは「情報発信」「権利保護」「発表」について。本年度は売買契約の補助等を行う機会があり、権利保護について知識を高める必要があると感じた。

相談支援の概要（抜粋）

	内容		対応
1	ある作家の作品を購入したい。調整をしてもらえるか。	→	当事者間の調整、契約補助、額装代行等を行い、作家の収入につながった。
2	家族より、画集出版にあたり契約等に立ち合い、協力してほしい。	→	出版社との打ち合わせ、契約等に立ち合い、作家の利益となるよう協力した。
3	県外の研修で熊本の作家について、紹介したい。情報提供をしてもらいたい。	→	作家に確認をとり、情報提供を行った。
4	建築会社より、新築物件に作品レプリカを飾りたい。	→	連絡調整、金額設定、額装支援等を行い、作家と共に納品を行った。
5	企業より、ギャラリー兼事務所を作りたい。アドバイスを頂けるか。	→	専門家の紹介、事務局のノウハウから情報提供を行った。
6	行政より、リトアニアの大使館が障害者芸術で交流したい。協力できるか。	→	担当者と直接やり取りを行っていたが、コロナ状況により、延期となっている。
7	芸術団体より、アートイベントを開催するので出展協力してもらえないか。	→	打ち合わせを重ね、大規模なアートイベントで展示を行った。
8	校長先生より、地域の小中学校で子供たちに作品を見せる機会を作してほしい。	→	学校との調整、作家との調整を行い、小中学校で展示を行った。
9	TV イベント会社より、イオンで行うオリパラ記念ワークショップで一緒に何かやれないか。	→	作品のデータを提供し、選考があり、参加者全員で作品を仕上げるWSが実現した。
10	報道関係者より、取材を行いたいのので調整してほしい。	→	日時の調整、作品データ、作家データ等を提供し、新聞掲載につながった。

評価・発信

ウェブサイト 本事業に関する記事

投稿数 37 件

アクセス数 5,186 件



アール・ブリュット パートナーズ熊本

検索



メディア

11月16日	熊本日日新聞 掲載
1月7日	熊本日日新聞 掲載
1月25日	KAB 『くまパワ』 展覧会の紹介
1月26日	熊本日日新聞 掲載
1月26日	TKU 『Live News』 展覧会の紹介
1月26日	KKT 『てれビタ』 展覧会の紹介
2月4日	熊本日日新聞 掲載

事業実績の詳細

県内における事業所等に対する相談支援

「障害者芸術文化活動支援センター@熊本 愛隣館」の認知度の高まりとともに増えてきた、個別の相談を専門家と連携し対応した。

特に本年度は、作品原画、又はレプリカを購入したいというニーズに応えて、作家の権利を第一とした売買契約の調整、協力、補助を行った。また、作品を発表する機会として常設の展示場の整備や事業所が制作する物販物の販売場所の確保等、多岐に渡る課題の解決に向けて取り組んだ。

芸術文化活動を支援する人材の育成

①1月開催の「生の芸術 Art Brut 展覧会vol.7」では、開催3日前から行った会場準備にてスタッフを担当分けし、それぞれの持ち場を協力者とともに作り上げていった。スキルアップの場として、延べ30名が参加した。②展覧会期間中は、関係団体、福祉事業所等延べ84名のスタッフで受付・運営を行い、OJTで運営の技術と新様式の展覧会について学んだ。③キュレーター長尾萌佳氏のギャラリートツアーを事前に撮影し、展覧会開催1週間後に合わせてYouTubeで配信した。新型コロナウイルス蔓延防止期間と重なって、会場に来ることが難しかった方々にも、インターネットを利用して参加してもらうことができた。④インターネットの取り組みの一環として、各作家家族、支援者が撮影した制作風景動画を会場内とホームページ上で公開した。作家の普段の様子が分かり大変良い、という評価も頂いた。⑤県人権同和政策課のWEB研修会で芸術活動支援について講演し、参加者に障害のある人々の理解、人権への配慮、そして、活動の周知と芸術活動支援への興味を深めて頂くきっかけとなった。

関係者のネットワークづくり

事業継続の中から、ネットワークの拡がり生まれ、新たな取組につながってきている。本年度は、熊本県、熊本県立美術館、(株)再春館製薬所から多大なる協力を頂き、展覧会を開催・運営することができた。また、展覧会にはキュレーターや会場設営、グラフィックデザイナーに加え、県内福祉事業所7箇所のグッズ販売に、熊本市内で福祉事業所制作のグッズショップUMUの協力を頂いた。

さらに、やまがアート実行委員会や荒尾市の小・中学校より、展示協力の依頼があり、コロナ禍で制限のかかる中でも展示会を行うことができ、ネットワークを広げる動きができた。

発表の機会の創出

1月26日より県立美術館本館で、5年連続開催の「生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7」は、会場がこれまでの6倍の広さとなる第一展示室に場所を移し、沢山の方にご来場頂いた(12日間、1,656名)。蔓延防止期間中で、特に外出自粛を強いられる福祉事業所からの来場は例年より少なかったものの、他の来場者が多く県民の関心の高さが伺える展覧会となった。

また、昨年度から運用している展覧会用のホームページを活用し、作家家族や支援者が撮影した制作風景の動画を公開した。コロナ禍で外出が難しい方でもインターネット環境下であれば、いつでも見る事ができるようにし、アクセシブルな展覧会となった。

コロナ禍の影響が続き、「アール・ブリュット移動美術館」は感染リスクを考え、控えざるを得なかったが、出展協力には感染症対策を施したうえで、要請に応じた。11月、やまがアートでは、廃校となった旧鶴城中学校で行われた地域のアーティストイベントに出展協力要請があり、一番人通りの多い旧職員室で展示を行った。12月、くまもとテルサで開催された人権フェスティバルでも、会場入り口で展示と作家の作品制作の実演を行い、多くの来場者に制作風景を見てもらった機会となった。さらに12月、荒尾市

の緑ヶ丘小学校、荒尾第三中学校でも展示を行い、小中学生にアール・ブリュットの魅力を伝えることができた。そして、展覧会直前には熊本県庁地下通路での展示も開催でき、アール・ブリュット展覧会や様々な活動を知ってもらう機会となった。

情報収集・発信

会員ネットワークやホームページ上で情報の収集、発信を行っている。

また、展覧会場には継続して行っているアンケートに作家情報提供欄を設け、新たな作家情報を随時受付を行っており、本年度は新たに13名の作家を発掘した。ホームページや会員ネットワークで展覧会等の情報を収集するとともに、情報発信の場としても活用し、会員メールで33件、ホームページで37件の情報発信を行った。

展覧会開催にあたってプレスリリースを行い、新聞で作家にフォーカスした特集記事など4回、テレビ(KAB、KKT、TKU)では3回取り上げられ、多くの人の関心の高まりを来場者の感想等から伺えた。取材協力も、作家、記者との調整、データ提供、取材対応などをスタッフが担った。

成果のとりまとめ

事業報告をまとめた冊子を作成し、関係機関に配布する。また、ホームページ上にも報告書データをアップロードし、幅広い人たちが閲覧し、芸術活動支援が普及するように努める。展覧会場やオンラインで記入してもらったアンケート結果は、一覧にして作家・支援者に届けることができ、新たな創作意欲につながった。さらなる支援への動機づけとなった。

本事業に関わる第三者評価について

県内の方々との意見交換より

1. 展覧会ポスターを担当したデザイナーより「“可能性”を広げる。つなげる。を思い。考えながら、デザインを練っていました。初めての関わりの中で、運営の皆様の人と人の関わり方や距離にある豊かさ、暖かさは、きっとこの現代により一層必要なものとして学ばせて頂きました。」
2. 展覧会で物販を担当したショップ経営の方より「作品を観てこられた方々は口々に“生気を感じた”“圧倒された”とやや興奮状態で物販コーナーにお寄り下さいました。なかには“私も描きたくなった”という人も。それぞれに感じ取られた作品の持つ力と一緒にお気に入りの雑貨を連れて美術館を後にされていました。」
3. 特別協力を頂いた経営者より「とても意味のある活動です。皆さんの居場所を作りましたね。続けて応援していきたい」

県外の方々との意見交換より

1. 展覧会のキュレーションを担当して頂いた福岡のキュレーターより「今回はじめてこの展覧会に、作品選定、会場構成という形でお手伝いさせて頂きました。コロナの影響下で十分な現地調査ができなかったことが心残りですが、展覧会を作る過程で作品や記録から垣間見ることができたそれぞれの作家さんたちの7年間の道程に心打たれました。障害の有無に関わらず、生活を営みながら創作を続けることはとてもエネルギーがいることですが、作家やご家族、支援者の方々の努力や積み重ねに頭が下がる思いです。貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。」
2. 展覧会場作りに協力頂いている福岡のインスタレーションアーティストより「これまでより大きな空間になり、計画も準備もそれに比例しましたが、スタッフや関係者の皆様のご尽力で良い展示ができたことに感謝しております。」

誰に教わったわけでもない。熊本が育んだ魂の表現

生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7



1.25
2022 (火)

2.6
月曜日休館 (日)

観覧無料

主催：アール・ブリュット(生の芸術)パートナーズ熊本
共催：熊本県立美術館 / 熊本県教育委員会 社会福祉法人愛隣園 令和3年度熊本県障がい者芸術文化活動普及支援事業 (令和3年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業)
後援：熊本県 熊本市 協賛：くまもとハートワーク 特別協力：株式会社再春館製菓所 助成：熊本県障害者スポーツ文化協会 熊本善意銀行 ひのくに知的障害者生活サポート協会

生の芸術 Art Brut 展覧会 vol.7

出展作家の紹介

松本寛庸 Matsumoto Hironobu

1991年 山鹿市



松本は色鉛筆と水彩ペンを用い、極小の点や鱗のような小さな面の集積で、天体や地図、建物、動物、人間など様々なイメージを描き出す。画題はゴジラや、オリンピック、パラリンピックにちなんだものなど実に多様だが、ブラックホールや彗星、銀河など宇宙にまつわるものは、幼少期から天体に興味があった松本が一貫して描いてきたテーマだ。抽象的な幾何学模様の作品は、分子や原子などの微視的な物理現象を表しているのではないかと思わせる。幅1mを超える画用紙が数点組み合わせられる大作は、細かな作業の蓄積が果てしなく広がる圧巻の見応えだ。

3歳で高機能自閉症と診断された松本は緻密な描写力や記憶力を持つが、単純に写実を極めるのではなく、点や面の集積でイメージを構築するという独自の画風を確立した。一般企業に勤めた9年間も、多くのストレスを抱える日々のなか絵を描き続けていたそうだ。確かな足取りで新たな世界を描き出してきた。

2010年の「アール・ブリュット・ジャポネ展」(パリ)以降、スイス、オーストリア、ドイツ、東京など国内外の展覧会でも作品が紹介される。2015年、2021年のVOCA展に出品。

藤岡祐機 Fujioka Yuuki

1993年 熊本市



はさみを使って、紙に0.1mmに満たない細さで切り込みを入れていく。切られた部分はらせん状にカールする。最後に斜めの切り込みを一カ所だけに入れるのが完成の印だ。

藤岡は自閉症のため、言葉を話さない。小学1年で初めてはさみを持ち、寝る時も手放さなかったという。彼にとって、切る行為が特別な意味をもつことは間違いない。しかし、完成した一片の大きさや形、紙の選定のこだわりをみると、どうやら単純に切ることを楽しんでいるのではないようだ。

幼少期の切り絵作品は色、形の様々なバリエーションがあるが、近年の細かな切込み作品もそこから発展したもので、外側の形や切り込みの長さには彼なりのねらいがあるようだ。

紙の質感、色、形、切り込みのバランス、すべてが慎重に計画され、彼にしかわからない数ミリ単位で立ち現れる美の形が追求されているのではないかと思えてくる。切り出された紙片をとおして、彼が見ている繊細な世界をわずかでも垣間見られた気持ちになる。

近年の主な展覧会に2020年「ライフ」展(熊本市現代美術館)、「あるがままのアート」(東京藝術大学大学美術館)など。

国内外の展覧会やアートフェアでも紹介されている。

荒木聖憲 Araki Minori

1994年 玉名市



繊細だ。まるで油彩画のように、厚みや質感まで紙だけで自在に表現している。テレビで見た“放浪の画家”山下清にあこがれて、中学時代に独学で始めた。つまんだ色紙を爪を使って切り出し、画用紙にのりで一つ一つ貼り付けて作り上げていく。完成するまで1~3カ月かかるという根気のいる作業だが、仕事がある平日でも毎日6時間は没頭する。大画面の作品になると1年半をかけることもある。

大作《四季彩の楽園》は、それまで培ってきた技術をすべて注いだ集大成的な作品だ。土の層を貼り、その上から葉や花を貼り重ねていく。それぞれの花の特徴が、様々な大きさ、形にちぎり分けた紙片やこよりによって巧みに表現されている。毎年新たな試みを披露してくれる荒木だが、2021年に制作した《カフェモカのココナッツパイ》では、透明なガラスの輪郭線や、中の液体、ステンレスの水差しに光が反射する様といった、光や物質の質感を表現することに挑戦したようだ。

上村修一 Uemura Shuuichi

1950-2017 菊池市



40歳頃からうつ病と心疾患で入退院を繰り返し、50歳で町役場を退職。自宅にこもり、アルコール依存症にも苦しんだが、妻の勧めで通い始めた教会と、子どものころから好きだった。絵が回復の支えとなった。絵は2009年（59歳）から描き始めた。心筋梗塞や心不全を起こしてからはソファベッドであおむけの姿勢のまま使うことができる油性マーカーを画材として選んだ。

幾何学的な円弧の集積によって、描き出される画面は一見すると抽象的だが、人の目や風景、花などの有機的なイメージが浮かび上がってくる。晩年の作品はより具象的な女性像や、聖母やキリストを思わせる人物像が多く描かれた。

2017年2月、心不全のため、66歳で死去した。同年1月、最後に描いたのは、新約聖書に登場する「マグダラのマリア」と「叫び」というタイトルの2作品だった。

内野貴信 Uchino Takanobu

1974年 熊本市



様々な大きさに切った段ボールや厚紙に、アクリル絵の具を使ってカラフルな絵を描く。モチーフは身近な食べ物や靴、風船、人、動物、名画の模写など実に幅広い。背景はパッチワークのように様々な色で塗り分けられている。

いずれも見たままの写生ではなく、彼の頭の中にあるイメージが絵になるようだ。独自の観点で特徴がとらえられた平面的なイメージは、一見すると単なる丸や四角形に見えるものもあるが、裏面に書かれた説明を読むと「なるほど」と納得させられる。

類似する図像が色違いで展開されるシリーズ作品も彼の特徴の一つだろう。王林やフジなど品種が描き分けられているのも楽しい。スニーカーや石など立体に色を塗ることもあるそうだ。

見るものは内野のイメージの遊びに誘われる。

大林健吾 Oobayasi Kengo

1951年 熊本市



大林が描くのは、具体的な形を結ばない線と筆触からなる抽象的な絵画である。ただし中には《秋の果物》《カブとポット》《バナナ》など具体的なものの題名がつけられているものもある。オレンジ色が目立つ《秋の果物》は、柿やみかんを連想させるが、題名とそれらの色彩は必ずしも一致しなかった。おそらく彼のイメージの中には対象物があり、絵になる過程で色や形といった具体性が消されていくのだろう。塗られた部分と余白との均衡が快い感覚を誘う。文字とも見える複数の形が散らばっている。解読できるものではないが、まるで擬声語か擬音語のように画面から囁きが聴こえてくるようだ。

母親が大好きな大林は「おかあさん、おかあさんがええもん」とつぶやきながら絵を描いているらしい。描き込まれた言葉は母への秘密のメッセージなのかもしれない。

岡井紀代子 Okai Kiyoko

1951年 熊本市



生き物も食べ物も、岡井の手にかかればすべて、色彩豊かな装飾品となる。そのままTシャツやアクセサリー、バッグなどのデザインに活かされそうだ。虫や魚や獣たち、果物や草花まで対象物に選ばれたものは、すべて本物の表面とは異なる配色で塗り分けられる。虹色の縞模様やドット、グリッドで描かれる動物や果物は愛嬌いっぱいだ。それらがおかれた背景は空白の場合もあり、色違いの色面に塗り分けられるものもあれば、対象物と同じように縞々や点々で飾られることもある。

以前は農業班にいて野菜を育てていたという岡井は、今では小さな筆で丹念にアクリル絵具を塗り分けることに専念している。制作する時は、図鑑を見ながら、気に入った生き物を見つけて描く。鉛筆でおおまかな下絵を描き、好きな色のアクリル絵具をチューブや瓶に直接筆を入れ、塗っていく。一つの色を塗り、筆を洗い、また次の一つを塗ることを繰り返し、線や点といった細かい模様も一つ一つ丁寧に描く。

緒方愛 Ogata Ai

1981年 熊本市



緒方の描く動物たちは、とても表現豊かに独創的に特徴がつかまえている。猫のからだは蜘蛛の巣を張り巡らしたような格子でうずめられているが、ふわふわした猫の毛並みなのだと思えばうなずける。イルカのような哺乳類と見える動物に4本足がついたものは恐竜なのだそうで、ピンク色のボディに、足はきれいなアボカドグリーンだ。どの作品も背景はとても装飾的である。《きょうりゅう》と《馬》はビーズを集めたようにカラフルなドットの詰合せの上にいるし、晴れた空の下にいる《白いねこ》の周りには野原に咲く花たちが顔を覗かせている。

新作の《お花》は、さらにたくさん色で画面が埋め尽くされる。花の形は判然としないが、おしべか花粉のような円の集積が見て取れる。新たな作風の登場で、これからの作品がますます楽しみだ。

菊川豊 Kikukawa Yutaka

1945年 菊池市



クレヨン、絵の具、マジックペン、靴墨と、様々な画材・技法を用いて、「自分の頭の中に出てきた」独創的なイメージを描く。人の顔や魚、鳥を合体させたような不思議なイメージがしばしば登場する。それらは、どこかピカソのキュビズム作品を連想させるし、カラフルで、ユーモラスでもある。そうかと思えば、墨汁を使った《ゴリラ》のような凄みのある作品もあり、その作風の幅広さに感嘆させられる。

中学を卒業後、家業の青果店などで働き、50歳を過ぎてからグループホームで暮らしている。絵を描き始めたのは64歳の時で、施設のレクリエーションがきっかけだった。最初は乗り気ではなかったが、楽しさに目覚めると自室で創作に没頭するようになった。2015年に熊本県立美術館分館で開催された「第1回アール・ブリュット展覧会」に作品が選出されたことで、さらに創作意欲が増したという。

北島宣夫 Kitajima Norio

1975年 宇城市

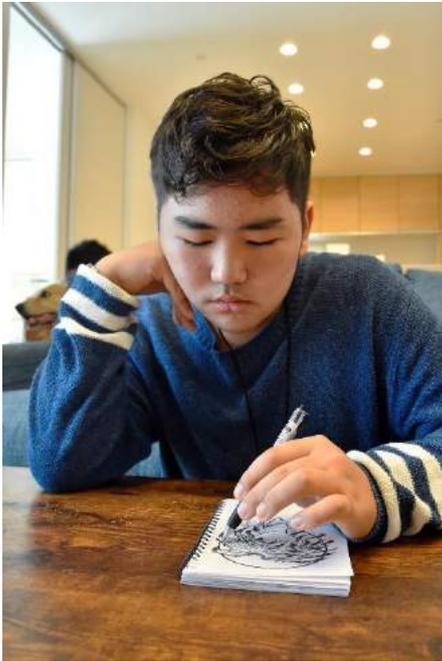


小学1年生の頃から、自宅で毎日1枚のペースで絵を描いてきた。4歳で自閉症と診断された。言葉が出ないことを心配した母親が、「プールの色は水色」などと色を塗ることを会話のきっかけにしたことが、絵を描き始めた原点という。その後、鉄塔が好きで高台へ散歩に連れていってもらったうち、そこから見える列車に興味に移った。「つばめ」や「かごめ」など列車は鳥の名前が多かったため、鳥が大好きになった。

水彩やアクリル絵の具で、画面いっぱいに描かれる鳥の絵は、体つきの特徴が輪郭線で捉えられ、羽は点描で表現される。鳥だけでなく、犬やカモシカなどの動物も、愛らしい顔つきで描かれる。

木本愛喜 Kimoto Aiki

2006年 八代市



複雑なボールペンの描線が埋め尽くす画面は、部分によって様々な表情を見せる。同心円や直線の重なりが竹細工の網目や青海波の文様のように見える部分もあれば、円の中に鍵型のパーツが放射状に配された機械の歯車のようなイメージが散りばめられていたりする。全体を見渡すと、奥行のある迷路のようにも見えてきて、想像力が掻き立てられる。ボールペンの線は、塗り重ねることで太さが調整されており、線の強弱が陰影のような表情を生んでいる。

近年はボールペンだけでなくアクリル絵具や油絵具を用いるようになった。アクリル絵具を用いた新作では、絵の具の混色によってつくられたグラデーションと奥から手前にせり出してくるような黒い線の構造体の対比がおもしろい。

作品のテーマについて本人は「説明できないけど、手が勝手に動く。僕にも分かんないんですよ」と語る。幼い頃から暇さえあれば、何かを描き、自分がいいと思うまで制作を続けてきた。

映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』や絵本の『ミック』シリーズ、エッシャーのだまし絵など、蓄えられた様々なイメージをもとに、手に導かれるまま画面を作り上げているようだ。

鎌崎勝芳 Kuwasaki Katsuyoshi

1985年 菊池市



「形や物にとらわれず、自分の感性で見たものを描く」という鎌崎の作品は、一見すると完璧な抽象絵画のようだ。クレヨンでしっかりと塗り込まれた色鮮やかな面の組み合わせには、鎌崎の洒脱な色彩感覚が表れている。

施設で絵を描く際は、特定のモチーフを見て描いているそうだが、出来上がった作品の形や色は、必ずしも対象と対応していないようだ。例えば《バナナとレモン》という作品は「右の小さな黄色のかたまりがレモンで、左の少し大きい方がバナナだろうか、赤い3つのしずく形は何だろう？」とタイトルからあれこれ思いめぐらせたくなる。そんな楽しさもあるが、実際のところ、鎌崎は見たものを絵として描くアウトプットの仕方がユニークなのだろう。見たままを描くのではなく、見たときの印象や気持ちを、色や形に乗せて表現しているのかもしれない。

駒田幸之介 Komada Kounosuke

1989年 熊本市



駒田はボールペンや細いマーカーやクレヨンなどで画用紙に線を引いていく。線は何かの形を描くのではなく、ただひたすら同じ方向に引かれ、画面が埋められていく。いつしかその線は塗り重ねられ、三角形や四角い形を作っている。すると今度は線の向きと色彩が変えられ、90度交差した形で新たな形が塗り重ねられる。こうしてできあがった画面には、色違いのいくつかの形態が、並んだり斜めに組み合ったり、重なったりしている。ときには大きな余白もあらわれる。形に囲まれて見えてきた余白である。まれに風景や花を描くこともあるようだが、それらにしても線で塗りつぶされて形が現れてくるものである。

3歳で自閉症と診断された。城南町の生活介護事業所に通い、絵を描いて過ごす。高速道路が好きだという駒田は、一心に線を引く手を止め、突然、立ち上がり部屋の窓から遠方の高速道路を眺める。そしてまた画面に帰っていく。

寺本澄子 Teramoto Sumiko

1955年 熊本市



寺本が描くのはいつも「お友達」だ。色鉛筆やボールペンで描かれた「お友達」は、まん丸の輪郭に、眉、目、鼻、口が点と線で表されている。口が開いていたり閉じていたり、わずかなバリエーションはあるもののほぼ同じ顔が画面を埋め尽くしている。顔と顔は密着し、ときには複数の色で重ねて描かれたり、顔の大きさが徐々に変化していて、まるで模様のようなのだ。

「私にはこれしか描けないもん」と言う寺本。描く際に迷いを見せることもあるが、やはりいつも「お友達」を描く。楽しいと明るく、気分がさえないと暗い色に、その日の気分で色彩が変化するそうだ。

永野優希 Nagano Yuki

2000年 熊本市



紙の長辺と平行にひかれた大胆な線。それらをつなぐように複数の短い線がひかれ、はしご状の様子が連なっている。短い線と線の上にさらに細かな線がひかれている部分や、区画の中が色とりどりに塗り分けられている部分もある。紙いっぱい網目のように広がる線や面は、カラフルで、不規則で、見飽きない。

永野は、特別支援学校時代に通った放課後デイサービスの芸術活動の一環で中学時代から絵を描き始めた。何か特定の対象を描いているのではなく、思いつくままに線を引き、色を塗っているようだ。「フン、フン、フン」と、ご機嫌に鼻歌を口ずさみながら描き、ときおり鼻歌を止めて箱から水彩ペンやクレヨンを選ぶ。画面にのせる次の1色の選択は、とても真剣なのだ。

野尻三正 Nojiri Mitsumasa

1947年 山鹿市



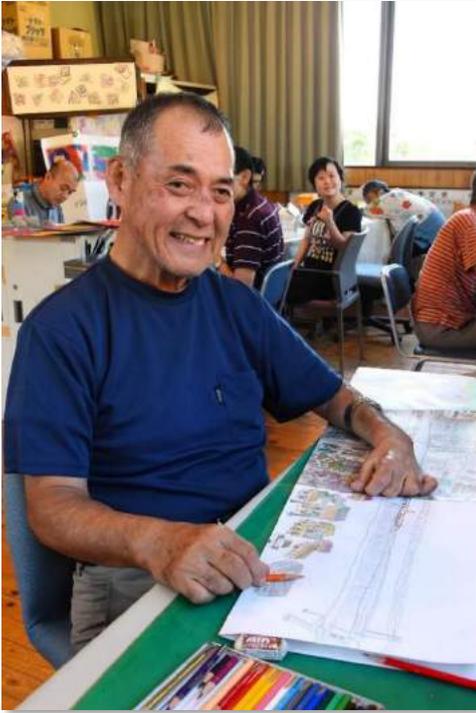
野尻の作品はどれも紙のすみずみまで高い密度で描き込みがほどこされているという特徴があるが、この7年で作風の変遷が見られることも興味深い。2015年頃の作品は、クレヨンで描かれ、個々のモチーフは大きく、形が比較的はっきりとしていた。ところが、次第に画材はクレヨンから細かな線を描くのに適した色鉛筆やボールペンに移り、一つ一つのモチーフは模様のような輪郭線となって画面全体に溶け込んでいった。

2021年に描かれた新作は、ボールペンの震える線で描かれた、花や葉のような植物の様子が全体を埋め尽くし、その隙間を色鉛筆のカラフルな色が埋めている。一つ一つのモチーフは判然としないが、人の顔、松かさ、シダ植物の葉のようなもの…と様々なイメージが隠れているようだ。1点1点バラエティに富んでいて、どれも他では見たことのない作品ばかりだ。

これからどんな絵を描きたいかという支援者の質問に「他の人が描いとらんような絵を出したが良か」と答える野尻。1作品ごとに新たな試みが密かに繰り返されているのかもしれない。

濱崎文明 Hamasaki Fumiaki

1952年 熊本市



濱崎はこれまで見てきた光景の記憶をもとに、俯瞰図や、斜め上から描いた風景画、身近な情報が書き込まれた地図のようなものなど、様々な作品を描いている。川には魚、道路には車や人がぎっしりと描き込まれ、どの絵もにぎやかだ。

長年熊本で暮らした濱崎が描くのは、記憶の中にある熊本の景色だ。散策や外出が好きで、公共交通を利用して、気ままに散策してきたため、彼の絵には過去の記憶を含め、たくさんの情報が詰まっている。数年間かけて画用紙をつぎ足しながら、

熊本の市街地を描いている《僕の庭》という作品は、現在11枚にも及ぶが、まだまだ広がっていきそうだ。濱崎の描く街の景色は、彼が歩き、生活してきた記憶の集積でもある。

原三保子 Hara Mihoko

1956年 熊本市



ボールペンや鉛筆の震えるような線が色画用紙いっぱいの建物や動物たちを形づくっている。今回の出品作品はすべて着色なしで線で描かれたものだが、ときにはクレヨンで彩色されることもある。ライオンや野うさぎといった現存の動物もいれば、人間のようなポーズの恐竜も混じっている。

震えるような線といったが、実は線はゆらゆらしているのではなく、短い単位の線が平行したり、小さな四角形に画割りされたりしているのだった。城の建物ならば、それらは石垣の構造を示しているのだとわかるが、動物の身体も同じ構造を持って描かれている。原は写真や動物図鑑、恐竜図鑑を見て描いている。

描くうちに見本から遠く離れ、想像力を膨らませた作品が次々と誕生してきた。

本田美奈子 Honda Minako

1956年 熊本市



本田のスケッチブックには色とりどりの絵と文字がセットで描き込まれている。どの絵もカラフルなパッチワークのように色分けされており、フラミンゴやダリアの花は独創的な形をしている。そこに、図鑑に載っている情報らしき、動物や植物、雲の名称などが書き込まれ、さらに日記のように年月日も記されている。「空気中の水 地球をぐるぐる」といった切り取られた言葉と、本田流にアレンジされた絵の組み合わせが絶妙で楽しい気分させられる。

知的障害をもつ本田は、2001年に施設に入所したころから本格的に絵を描き始めた。展覧会にも出品し、2013年の「第26回熊本市民美術展アートパレード」では奨励賞を受賞している。

曲梶智恵美 Magarikaji Chiemi

1981年 熊本市



十代以来、油絵制作や編み物、ビーズ細工、園芸など、手作業が中心の趣味の活動に力を注いできた。主治医の進言もあって、言語によるコミュニケーションよりも創作を通じて自己表現を行うようになった。手先の器用な曲梶には、精緻にイメージを積み重ねたコラージュ作品が多い。これまでの曲梶の作品は、編んだ麻紐を幾重にも組合せたものと、写真を切り貼したものという2種に大別できた。前者では色とりどりの上向きのU字型や渦巻きがカラフルに着色され、圧倒的な密度で画面を埋め尽くす。後者では、自身で撮ったものやインターネットから拾い出した写真を用紙に印刷し貼り合わせ、どこにも知れぬ風景が現れる。

2021年の新作《浮遊》や《秘密の晩餐会》では、羽や押し花がコラージュに加わり、さらにビーズ編みの編み図がクレヨンスクラッチの技法で描き込まれる、新たなタイプの作品が登場した。視覚的イメージに、編み物という手作業の感覚が編み図の形をとって盛り込まれているようだ。

牧野慎也 Makino Shinya

2001年 菊池市



これまでの「アール・ブリュット展」では、画用紙にクレヨンや絵の具で描かれた作品と、小さなカードに様々なモチーフが描かれ、それらが透明テープでコーティングされたシリーズの2種類が紹介されてきた。今回はこれに加え、ボールペンの作品が新たに加わった。ペン先で幾重にもひかれた線によって紙の繊維が毛羽立ち、不思議な質感が生まれている。

クレヨン画はおもに日中を過ごす施設で作画の時間に描かれたもので、花や果物など身近なものがモチーフとなっている。画面いっぱいズームアップされたり、デフォルメされたモチーフは、意外にも特徴が良く捉えられており、見る者に新たな気づきを与えてくれる。小さなカードに描いてテープでコーティングする作品群は、今回は、黒のマジックペンで書かれたモノクロームだ。網目や丸の集積で、キャラクターや動物、建物の絵が描かれている。これらのシリーズは自宅で制作されているとのこと。

それぞれの画材によって異なる作風が展開されているが、どの作品も対象を見ることの楽しさや、画材に導かれて描くことの楽しさが伝わってくる。まだまだたくさんの表現の引き出しを持っているのではないかと期待してしまう。

山口秀隆 Yamaguchi Hidetaka

1982年 宇土市



幼少の頃から電車が大好きだった山口は、自分で撮影した写真や鉄道雑誌を見ながら、画用紙いっぱいに電車の絵を描いてきた。新幹線からローカル線まで様々な種類の車両の特徴はもちろん、敷石一つ一つまで丹念に描く。そんな山口が、動物もよく描くようになったのは、熊本市動物園の写真集を贈られた2018年頃からだった。そこからさらにネオンが煌めき人通りの絶えない街の風景を描くようになった。そして2021年に描かれた新作《虹の幻想》《虹の中の動物たち》では、抽象画のような虹色の画面が現れた。虹色の模様は、電車の背景として描き込まれていたモザイク状の夕焼け空にも似ているが、より多くの色が混ざり合い複雑な画面になっている。その中にマジックペンの輪郭線で描かれた、動物や花の形が潜んでいる。

描く対象が広がり、作風にもバリエーションが出てきた山口。本展に登場するたびにその変化で観客の皆さんを楽しませてきたことだろう。

山品聡美 Yamashina Satomi

1967年 山鹿市



山品は日々、スケッチブックにボールペンや色鉛筆で文字を書いている。内容はどれも身近なものごと。県名や都市名が並んでいるものは、県の名前の練習として書かれたもので、北海道から沖縄まで、順に書いたそう。札幌など都市名が混じっていたり、長野県に「雪がふる町」というタイトルがつけられていたりするのがチャームだ。一月ごとに月日と和風月名が書かれたカレンダーのようなものや、いかりや長介、高木ブーといったザ・ドリフターズのメンバーがイラストとともに描かれているもの、日記や手紙など、山品の好きなものや日常の様子が伝わってくる。

文字はそれぞれが独特にアレンジされており、山品オリジナルの書体のようなものもある。それらが集まると、詩の形式か新しいタイプの書道かとも思わせる。文字は改行ごとに一字下げられ、列は微妙に斜行している。意図的に図案化されたもののようにも見えてくる。

山本規仁 Yamamoto Norihito

1998年 熊本市



始皇帝、織田信長…歴史上の英雄たちも、彼の空想の世界では、謎の宇宙怪獣のような衝撃的な姿をしているようだ。A4のコピー用紙にボールペンで、細かい線を重ねて描く作品はおどろおどろしくもあり、ユーモラスでもある。ゲームなどから着想を得て、動物と人間のイメージが混ざり合っているという。ただ描いた本人すらも「何ですかね？」と返答に困るものもある。小学校低学年の時、1人で通学するのを心配した母親に「1人じゃない。仮面ライダーと一緒にだよ」と笑って答えていた。育み続けた空想の世界から創造物が飛び出した。6歳の時、高機能自閉症と診断された。就寝前のそうめんの木箱の上が「アトリエ」だった。就職し、絵を描く時間の確保が難しくなった現在でも、制作を続けている。

吉村優音 Yoshimura Yuuto

2011年 熊本市



小学校入学後に担任から進められて絵を始め、絵画やアニメのキャラクター、動物などを自由奔放に描くようになった。小学5年生になった昨年からは油絵教室にも通い始めた。最近では絵本の模写が日課だ。

《どうぶつパラダイス》はNHKの番組を見て描いたものらしい。キリンやゾウやライオン、パンダなどの動物たちが画面いっぱいにぎっしりと描かれている。二足歩行のキャラクターのように描かれた動物たちは、ニコニコと笑顔のものもいれば、口をへの字に曲げた不満顔のものもいるし、服を着ているもの、大きいもの、小さいものと様々で見飽きない。構図や配色の巧みさのためか、惹きつけられる魅力のある作品だ。

アンケート

2022年1月25日-2月6日

来館者 1,656名 アンケート回答 187件





1. 規模が大きくなって、より多くの作品を見る事ができて、充実したひと時を過ごすことが出来ました。どの作家の方の作品も素晴らしく、並んで見ている方々も「すごいねー」と口々に言ってらっしゃいました。うんうんと頷きながら見ました。又、展示の仕方も、とても工夫されてるなあ!と感じました。素人なので、全くわからないのですが、作品の配置が良いなと思います。額装も、良いですね。作品にピッタリでひきたてるものにしてあるように思いました。どの作品にも、作家の方の想いとそれを応援しておられるスタッフの方々の頑張りも見てとれたと思います。今日は見に来て良かったです。どの作品も独創的でとても素敵です。色使い、構図、タッチどれも。毎年この展覧会を楽しみにしています。
2. アーティストさんたちの内面が形となって表れているようでどの作品にも惹き込まれました。3歳の娘は、動物がモチーフになってる絵や鮮やかな作品が気になっていました。「これはなんだろう?どうやって描いたのかな?私もハサミで作ってみたい!」等と言っていました。まだ0歳の息子もよく見ていました。
3. アルブリュットの作品が好きで、都合がつく展示会には複数回訪れて鑑賞しています。今回は作品数が多く、新作も展示されていて素晴らしかったです。大きな作品も広い展示スペースでみれて存分に味わうことが、できました。
4. まず、作品の圧倒的なチカラに時を忘れて見入ってしまいました。個性的な色使いに心が躍り、元気になれます。さまざまな技法は既成概念を破り、発想を自由にしてくれます。作者の内面を見るような衝撃もありました。辛いのかな、抜け出せたのかな、等と思いを巡らせました。また、展示には工夫も多く、多くの作品でしたが最後まで集中して観ることが出来ました。過去の作品と新作を並べることによって作者の成長も感じる事ができました。
5. 鮮やかな色使いや、絵の大胆さと緻密さ、作成された作家の方々の感性や思いを感じることができ、楽しく温かい気持ちになりました。ありがとうございました!





- 6 全て本当に綺麗で楽しい作品でした。どの作品も個性的で目を引くものばかりで、作家さんのこだわりや好きな物が見えます。障がいがあるものの、独特の感性で他の人には真似出来ない作品作りをされている作家さん方は本当に素敵だと思いました。また障がいの有無にかかわらず、好きな事を追求する大切さが感じられた展覧会でした。
- 7.鮮やかな色使いや、細かな作業、大胆さなどすごく感動しました。上手に描くとか綺麗に描くことももちろん素敵ですが、自分 という感性を表す事がとても素敵な事だとおもいました。
- 8.作家の人となりの説明が書かれており、その横に作品があることで普段どんな風にこの作品に向かって描いていたんだろう等、作品の奥にある作家の表情なども想像することができて楽しかったです。スポットライトやライティングなど展示空間の工夫がもっとあるとよかったです。
- 9.好きな作家さん目当てで行ったのですが、他にも好きな作家さんが増えました。県立美術館みたいに、しっかり天井が高くて、広く展示できる展覧会はいいですね。作品の力強さやメッセージが、よく伝わると思いました。楽しい時間を過ごしました。開催していただき ありがとうございます
- 10.物を創る人間として刺激を受けました。息子(自閉症)にも絵に限らず、どんな才能があるのか楽しみになりました。
- 11.毎年開催を楽しみにしています。今年は広い会場で各作家さんごとに多くの作品を見る事が出来て嬉しいです。どの作品も素晴らしく、時間があっという間でした。様々な方法で展示され1つ1つ見入ってしまいました。
- 12.圧倒されました。楽しかったり、悲しかったり、驚いたり、途中で休憩しながら最後まで感動しつづけました。





- 13.どれもすごくて引き込まれました。タイトルが「無題」というものもあり、どんな想いで描かれているのか、とても気になります。とてもこまかい作品も多く、どれだけの時間をかけているのだろうと思います。また作家さんの紹介パネルに愛がこもっていて素敵です。コロナ禍での開催でしたので、準備等大変だったかと思います。ありがとうございました。
- 14.感動しました。色彩がとても豊かな作品が多く、心が明るくなります。また繊細な作品もありとても根気のいることだろうと思います。来年も開催されることを期待します。
- 15.いつも応援しています。どの作品も心から湧き上がる感情を素直に表現されていて楽しく見させていただきました。コロナ禍にあって元気を頂ける展覧会でした。
- 16.どれも息をのむ作品ばかりで、時間がいくらあっても足りないくらいでした。今回の間近で観たり遠目で観たり、横から正面から、全体かスポットか等々楽しみ方も増えました。その日その時にお気に入りの作品作家さんも変わる不思議な魅力が尽くことのない空間でした。
- 17.作品を書いている映像をみて、みなさん真剣に絵を描くことに取り組まれているなど実感しました。どれも面白い作品ばかりで驚きました。
- 18.いろんな作家さんが独特な描き方や色、形をつかっていてとても素晴らしかったです。しかも独特なのに絵などに違和感がないという素晴らしさがありとても良かったです。いろいろな作家さんの思いがとても伝わりました。
- 19.会場が広がったので、よりゆっくり観覧することができ感謝いたします。作家さんのプロフィールから作品名までの背景を自分なりに創造させて頂き楽しい時間となりました。また来年も楽しみにしております。





20. 昨年から ArtBrut 展覧会を見に来ています。コロナ禍で遠出ができず、人との距離も遠く、孤立感やモヤモヤを感じることもあります。今回展覧会で作家の皆さんの作品を見て、圧倒され、元気をもらうことができました。次回も楽しみにしています。ありがとうございました。

21. 2.5 時間余り堪能しました。DVD を観て、作品を見直しました。自分の頭の中の貧弱さを思い知らされました。学校の「絵、美術」の教育をもっと”生の芸術”を引き出すべきですね。解説文が的確でとても分かりやすかったです。

22. 実際の作品を観て迫力、繊細さなど、言葉では表せない作品に圧倒されました。観たもののイメージしたものを自分の感性で表現されていて、描こうと思っても描けない、真似できない。すごい作品ばかりでした。鑑賞する時間が足りませんでした…。

23. 毎年楽しみにしております。今回はいつもより広い会場だったので、新たな作家さんの作品を楽しみにしていましたが、すでに有名な作家さんや、見たことがある作品の展示が多く、少し残念でした。熊本のもっと多くの作家さんの作品を見たいです。額装のマットが作品サイズに合ってなかったり、作品紹介プレートが紙で作ってあり、反っていたりするところ等も気になりました。物販コーナーがいつもより大きいのは嬉しかったです。今後も楽しみにしております。

24. 会場が広くなり、その分作品も増え見応えがありました。お客様もじっくりと見入る人が多く、観やすい環境づくりをされているなど感心しました。また、作家さんの動画も楽しく拝見してもらい、新たな発見が沢山ありました。スタッフの皆さん準備が大変だったと思います。お疲れ様でした。

25. 心の豊かさを感じざるを得ない作品ばかりでした。どの作家さんのどの作品にも妥協がなく、見ていて飽きませんでした。このような時勢ですが、作品を通して作家さんと交流している気持ちになり、このような心の通わせ方もあるのだと感じました。



アール・ブリュット パートナース熊本 理事・役員名簿

	役職名	氏名	所属団体及び役職
1	会長	西島 喜義	熊本市 元副市長 熊本市シルバー人材センター 理事長
2	副会長	安達 憲政	熊本市日日新聞社 前編集員 熊本大学文学部非常勤講師
3	副会長	林田 直志	公益財団法人 永青文庫 常務理事
4	理事	栗崎 英雄	熊本県知的障がい者施設協会 前会長 (第二つつじヶ丘学園)
5	理事	日隈 辰彦	熊本障害フォーラム (KDF) 事務局長 (ヒューマンネットワーク熊本)
6	理事 事務局長	三浦 貴子	熊本県身体障害児者施設協議会 会長 (愛隣館)
7	監事	川村 隼秋	熊本県手をつなぐ育成会 会長
8	監事	塘林 敬規	熊本市社会福祉施設連合会 事務局長 (大江学園)
9	アドバイザー	藏座 江美	一般社団法人ヒューマンライツふくおか 理事 元 熊本市現代美術館 主任学芸員
10	アドバイザー	岩下 勉	熊本市日日新聞社デジタル編集部 部長
11	コーディネーター	西 恵美	熊本市手をつなぐ育成会 会長
12	コーディネーター	土井 章平	野々島学園 理事長

社会福祉法人愛隣園 事業事務局

	役割名	氏名	所属
1	理事長	三浦 一水	社会福祉法人愛隣園 理事長
2	事務局長	三浦 貴子	障害者支援施設愛隣館 総合施設長
3	事務局	田中 裕一	障害者支援施設愛隣館 副施設長
4	事務局	富田 芳博	障害者支援施設愛隣館 事務長
5	事務局	納富 久	障害者支援施設愛隣館 総務部
6	事務局	堀田 直美	障害者支援施設愛隣館 総務部副主任
7	事務局	久武 康博	障害者支援施設愛隣館 地域福祉部副主任
8	事務局	松本 薫	障害者支援施設愛隣館 地域福祉部
9	事務局	福山 清一	障害者支援施設愛隣館 生活サービス部
10	事務局	清水誠一郎	障害者支援施設愛隣館 生活サービス部

令和3年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業
(熊本県障がい者芸術文化活動普及支援事業) 報告書

(発行元)

社会福祉法人 愛隣園 障害者支援施設 愛隣館
《アール・ブリュット パートナース熊本》

〒861-0551 熊本県山鹿市津留 2022 <http://aileans.com/saca/>
Tel:0968-43-2771 Fax:0968-43-2793 Mail:ailinkan@magma.jp

(編集責任者)

三浦貴子

(企画・校正)

納富久 堀田直美 久武康博 松本薫

(印刷・製本)

株式会社トライ

(助成)

令和3年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業
(熊本県障がい者芸術文化活動普及支援事業)